

唐木順三全集

第四卷

筑摩書房版

唐木順三全集第四卷

昭和四十二年九月二十五日初版第一刷發行
昭和五十六年十月二十日増補版第一刷發行

著者 唐木順三

發行者 布川角左衛門

發行所 筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一一九一

電話 東京(29)七六五一(營業)

東京(24)六七一一(編集)

振替 東京六一四一二三

印刷 株式會社精興社
製本 鈴木製本株式會社

Printed in Japan 0395—74504—4604

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが小社読者係あてにご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

詩とデカダンス

新版のための序 三

事實と虚構 五

一 ダンディズム、デカダンス、ニヒリズム 五

二 事實と虚構 一五

三 風狂、風流 四二

四 洒落、戯れ 五七

狂の諸相 一〇四

一 風狂の詩僧——一休和尚 一〇四

詩と哲學の間

二 佯狂の畫人——八大山人	二三
三 狂歌師——蜀山人	二四
近代における藝術の運命	二四
一 社會からの逃避	二四
二 藝術・文學における感覺と思想	二五
三 ゴーガンの私記	二七
四 考へ、待つといふこと	二八
一九五二年版あとがき	二九
文學と哲學	三〇
文學と宗教	三二
文學と文章方法論	三六
觀客について	三五

練習について	二六
制作について	二六
死について	二五
方法と方法化しえないもの	三三
——ひとつのヴァレリイ解釋——	
主體か現實かの問題	二六
齋藤茂吉寫生説の指示するもの	二六
ドスイエフスキイの世界	三七
あとがき	二九
喪失の時代	二五
昔あつて今うしなつたもの	二五
頽落の時代	二七
政治、人を殺す	二九

羞恥心の喪失	101
季節の喪失	104
経験の喪失	107
失はれたもの	109
アダナの消失	114
現代とニヒリズム	116
現代の不安と無常	120
ニヒリズムの問題	123
雅號の消失	129
後記	139

詩とデカダンス

新版のための序

本にも運不運がある。『詩とデカダンス』は運のよくない本であつた。この本は昭和二十七年の十一月三十日に「フォルミカ選書」の一冊として創文社から世に送り出された。私はその三年前に『現代史への試み』を出版し、二年前に『自殺について』を出してゐる。そして、三年後の昭和三十年に『中世の文學』を出した。即ち現代を直接に扱つたものと、中世を扱つたものとの中間に『詩とデカダンス』は位置してゐて、その目次を見ただけでもわかるやうに内容もまたそれを示してゐる。即ちこの本の主題は近代批判であり、近代の歸結としてのニヒリズムにどう對處すべきかといふことである。西洋の近代が世界の近代を支配し、日本での近代化の問題は即ち西歐化の問題であつた。當然にそこから傳統と近代といふ問題が起る。そしてニヒリズムが近代の歸結であるとき、近代化に對して樂觀的ではありえない。寧ろニヒリズムから如何にして脱出するか、如何にしてそれを超えるかが現代の課題である。私はこの課題を自分自身に課した。そして日本の中世の宗教や文學、即ち傳統を、もういちど考へてみるべきであると思ひ、そこへ入つていつた。西洋や新大陸、またアジアで、さまざまな形で試みられたニヒリズム脱却の道は、結局は失敗や犠牲や苦惱のくりかへしであつたと思ふ。そしてむしろ、ニヒリズムを徹底させ、ニヒルをもニヒル化するといふ道、無をも無化し、空をも空ずるといふ方向より外に、それを超える道はないと思ふにいたつた。さういふことの端緒がこの『詩とデカダンス』に示されてゐて、私自身にとつても記念すべき本である。然しこの本は不仕合せにも、多くの誤植を抱へたまま、初版で葬られてしまひ、

ときに古本屋の棚に、案外な高値をつけられて並べられてゐることぐらゐが慰めであつた。

いまこの不憫な子に新しく世に出る機會が恵まれたことを、私はこの本とともによろこびたい。講談社の係の皆さんの御盡力によつて、誤植誤字や不備な點を正し、姿、形をととのへて、陽のめにあたることができるやうになつたことは仕合せである。

なほ本書中の『洒落、戯れ』の項は拙著『中世から近世へ』の中へ、『風狂の詩僧——一休和尚』は『中世の文學』の中へ、『教養といふこと』『虚構の魔術化』は『新版現代史への試み』の中へ収録してあることを附け加へておく。

新版に當つて、この本に入れるのが適當と思はれる四篇、およそ百枚を増補した。いづれも雑誌その他に發表したまま、從來の單行本には收められなかつたものである。左にその發表年月を誌しておく。

- 一 社會からの逃避——昭和三十三年八月 筑摩書房 講座『現代倫理』第五卷
- 二 藝術・文學における感覺と思想——昭和三十三年七月 岩波書店 雑誌『思想』
- 三 ゴーガンの私記——昭和二十八年九月 雑誌『新潮』
- 四 考へ、待つといふこと——昭和四十年二月 『神奈川縣教育月報』

昭和四十一年十月

唐 木 順 三

事實と虚構

一 ダンディズム、デカダンス、ニヒリズム

デカダンスとニヒリズムは、なほ今日の私たちの問題である。いや、氣がついてみれば、いつもすぐ近くに私たちをのみこまうとしてゐる深淵の、大きくひらいた口である。

最近、ある新聞社の特派員がパリからの通信を寄せてきたが、そのなかに、戦後共産黨に入黨したピカソの畫は、ソ連から「ブルジョワ・デカダンス」として、手きびしく批判されてゐると書いてあつた。ここにいふブルジョワ・デカダンスとは、戦後の我々の周圍に無數にくりひろげられた頽廢の現象、たとへば汚職、闇商賣、性遊戲、競輪、ストリップの如きものに代表された無軌道を指すであらう。しかしこれはデカダンス自身の頽落の姿ともいふべく、ブルジョワのデカダンスとは、實のところ無内容といはねばならない。元來が下降、頽落を意味するデカダンスといふ言葉は、ひとたびは高きところ、高貴なところに立つた經歷を前提とする。富のために

富を追求する自由の上にたつた企業家たち、もろもろの欲望の體系化であるところの市民社會に、更に下降すべき層がどこにあらう。高貴を知らない者が、どこに落ちうるのか。いはゆるブルジョワのデカダンスとは従つて、富の追求手段のでたらめ化、欲望の無秩序化以外の意味をもちえない。一八四八年の革命後のフランスの情況を書いたマルクスが、そこで「新しい人間」といつてゐるのは即ち労働者であつたといふことは注意すべきである。ブルジョワが新しく歴史の上に登場してきたとき、すでにそれは葬らるべき階級として、プロレタリアの前にたたねばならなかつたといふところに、ブルジョワの位置がある。さうして、さういふブルジョワ社會を、古くして高貴なところから侮蔑し、ブルジョワ社會の中にあつては、例外者、唯一者、餘計もの、地下室人、隠遁者、超人としてみづからを規定したのが外ならぬデカダンスの詩人たちであつた。

デカダンスの問題は私たちに切實なモラルの問題である。だがまたそれはひとつの歴史をもつた問題である。まづここでは歴史的に考へることから始めよう。

デカダンスは何よりもまづ、中間の、間のものである。廣くいつても狭くいつてもさうである。狭くいへばデカダンスは、ダンディズムとニヒリズムの中間、間である。もちろんそれらは互に他に涉り合ひ、相手に浸透し合つてはゐるが、たとへば私はここでダンディのポオドレエル (1821—67) を、デカダンスのヴェルレーヌ (1844—96) を、ニヒリストのニイチェ (1844—1900) を考へる。廣くいへばこの三人をとともにデカダンスとみうるでもあらう。しかしポオドレエルにおいてはその始原が、ニイチェにおいてはその克服が際立つてゐる。

ゴオティエは初めてポオドレエルに會つたときの印象を書き残してゐるが、念入りに剃刀をあてた頬には、青

味をおびた粉白粉の艶があつたと語り、底光りのする黒い生地の上衣からエナメルを塗った靴まで、いづれも細心に清潔と端正を心掛けてゐたと書き、「ボードレールは鍔紙で衣服をこすつて晴着めいたければしい艶を消す、あの地味なダンディスムに屬する」と書き、幼稚なブルジョワ趣味を嫌つたことを附け加へてゐる。ところでポオドレール自身は、身だしなみの完璧さは、ダンディにとっては、精神の貴族的優越性のひとつの象徴にすぎないと言つてゐる。隙のない服裝、端正な行住坐臥は「意志を強め、魂を訓練する體操にすぎない。」願ふところはただ精神の優雅と獨創性の、英雄的またストア的維持にある。マントの下で狐に噛まれてもなほ言をまげないで微笑するスバルタ人、頭に膏をぬり、顔を洗つて斷食につく使徒のダンディスムである。ポオドレールはダンディスムについてかういつてゐる。「それは殊に、民主主義が未だ全盛とならず、貴族主義が未だ部分的にしか動搖せず失墜してゐないやうな、過渡の時代に現はれる。かういふ時代の混亂にあつて、落伍し、愛想を盡かし、職を持たないが、生れながらの力を豊かに具へてゐる一部の人々は、一種の新しい貴族主義を打ち建てようとする——。ダンディスムは、頽廢期における英雄主義の最後の煌めきである。傾く太陽の如くに壯大であり、熱がなく憂愁に充ちてゐる。しかし殘念なことに、一切を浸し、一切を平等にする民主主義の上げ潮は、一日と、これらの人間矜持の最後の代表者たちを溺らしてゆき、これら天晴れの無能者の足跡の上に忘却の波をかぶせてゆく」(『近代生活の畫家』)。

富への自由な欲望、獨創と優雅を顧みない多數決の平等、エレガンスと趣味に無縁な俗物の擡頭しはじめた頽廢のなかにあつて、その頽廢から沒落するもの、頽廢中の頽廢の中に身を置いて、即ち浮浪人、犯罪人、娼婦、浪費、放蕩、泥酔、阿片吸飲の中に身を置いて、しかも毅然として英雄主義を維持すること、罪を犯しながらに

高潔であること、「死刑囚にして死刑執行人」であること、それが貴族的なダンディズムであつた。頽廢の選手として出場しながら同時に審判官であるといふ、引裂かれたところに自らを持するといふ不敵な魂をいだきながら、いふところのイロニイに生きながら、それを詩として表現するといふ手のこんだ逆説を維持する美の權化がポオドレエルであつた。神から最もかけはなれた泥沼にあつて神を求めてやまず、娼婦の神聖を説き、神に見放されることによつて神に近いといふさういふ中にあつて自らをひとつの華に化したところのその方法こそ、東洋の風來子にとつての駭きである。「われ汝を打たん」に始まる『われとわが身を罰する者』（『惡の華』）の詩は、彼のイロニイの何ものであるかを語るとともに、イロニイを詩に昇華した代表であらう。自らを惡の花に昇華する方法として、伊達好み（ダンディ）やいきや粹^すがあらう。また阿片や麻藥を手段にしての「人工樂園」もあらう。それは模倣が不可能ではない。問題は惡の花を花として、言葉によつて表現することにある。あれほどにポオドレエルのダンディズムを内容的にうけつぎ、生活にそれを示した太宰治が、みづからロマン的完成をいひながら、つひに詩型の詩を作りえなかつたことを想ひだす。具體的には類落詩人ポオドレエルがポオの翻譯者であるといふ一事、花にする方法をポオから學んだといふことは、事實であればあるほど、デカダンスを論ずる私たちに直接には解らないことである。象徵詩人マラルメの手引ともなつたポオの嚴密な作詩方法をもつて自らの詩を律するといふ訓練、練習は、幾何學的精神のデカルトを生んだ國の傳統なくしてはありえなかつたであらう。わが平安末期の貴族歌人、紅旗征戎を吾事に非ずといった藤原定家の、心と詞に對する洗煉された心遣ひでも、より多くゲミュートの問題であつて方法的な訓練とはいひかねるであらう。

このごろの或る新聞はバリのエグジスタンシャリストたちの生態をつたへてゐる。黒いズボンに黒いセーター

の女たち、よれよれのコールテン服をきて髪を肩のあたりまでたらしめてゐる男たちが、地下室酒場に集つて、安たばこをふかしたり高い聲で放吟したり、奇妙なダンスをしたり、高遠な哲學を語り合つたりしてゐる。在來の常識に反抗しての性的アナキー、詐欺、強盜もまた敢て辭さない。ある實存主義青年はエッフェル塔爆破の計畫をたててつかまり、他のものは牧師に變装して説教壇に登つて教會否定演説をやり、あるものは親の留守のうちに娘の實存主義者の大邸宅へ乗り込んで亂痴氣騒ぎをやつた末、家財道具をもちだして賣りとばした。さうして彼等はいづれもれつきとした家庭の子女たちだといふ。

恐らくこれらは、ヴェルレエヌ、ランボオを宗とするデカダンの徒の後裔であらう。だが、その相違は、後者がよつて立つサルトルにならつて、時間の中、時代のうちにあるといふことである。従つて時代に對して責任をもつ。たとへ逆の方から時代を批判したとしても、時代と社會、即ち政治に關心を示してゐるわけである。エッフェル塔の爆破、教會攻撃もそのあらはれである。ところで世紀の末のデカダンは、つねに時間の外へ出ようとした。時代の外、この世の外へ出ようとした。「どこでもいい、ただ、この世界の外であるならば」といふポオドレエルの言葉は、彼等によつて實行に移される。ポオドレエルにあつては、時間の中に、世の中にありながら時間と世界を超えること、忘れることが問題であつた。「怖るべき時間の重荷を感じまいとするならば、絶えず汝をば酔はしめてあれ」(『巴里の憂鬱』三三)、「この怪物、時間をつぶすことこそ、各人の最も普通な、また正當な仕事」(同上、四三)、「假裝と假面への興味、定住地への憎惡、旅への情熱」(同上、一二)、さういふことをもとめながら、生身の宿命として常にまた時間の中へつれもどされる。「然り、時間が支配する。再び時間が粗暴な獨裁權を掌握した。それは、私が牡牛ででもあるかのやうに、私を驅りたてる。そら、やい、しつ、畜生、汗

を出せ。罰せられて、生きてゐろ」(同上、五)。罪の償ひが死であることを知るカトリック教徒が、罰せられて生きざるをえないところに、その悔恨も、恐怖も、苦惱も、呪詛もあつた。その卑猥を偉大にし、屈辱を崇高にするイロニイにおいて「この病める花花」といふ『惡の華』の獻辭が生れたのである。

ところで、ヴェルレエヌ、ランボオにおいては、時間の外、この世の外への必死な「逃亡」がめだつてくる。

時間の追撃が急になつたといふことの背後には、いよいよ勢を加へてきたブルジョワ利益社會があつたであらう。街頭から街頭へ、酒場から酒場へ、娼婦から娼婦へ、北フランスへ、ベルギーへ、ロンドンへ、さうしてランボオは海を越え、文明を超え、原始の國々を放浪する。時間の急追をまぬがれようとすれば、逃亡に逃亡をかさねなければならぬ。悔恨する心を悔恨しつづけ、酔ひを更に酔はなければならぬ。デカダンスの享樂はここで必死の行の相をおびてくる。

キェルケゴオルは美的人間を定義して、瞬間から瞬間へ生きる人間、瞬間を享樂する人間とした。ところで彼の危険は、瞬間と瞬間との間の空虚にある。次の瞬間へ渡るためにはこの空虚を自力で越えねばならぬ。無限の非連續な瞬間を、その間の空虚を越すドン・ジュアンは、つひには力盡きて倦怠の地獄に陥ちる必然をもつといふのである。ところで、同じキェルケゴオルはまた次の如くにいふ。「詩人とは何か。心は人知れぬ苦惱に悶えながら、しかもその溜息や悲鳴が、美しい音樂になるやうに唇をつくられた、不幸な人間である」と。またハイデッガーは、ヘルダーリンを媒介しながら詩の本質を論じた文の結尾にかう書いてゐる。ヘルダーリンの時代は、神々は既に飛び去り、やがて來るべき神を待つ時代であつた。去りし神は「既に無く」、來るべき神は「まだ無い」といふ二重の「無い」の示す缺乏の時代であつた。ところで缺乏の時代であるが故に、この詩人は豊富